桜花

草場船山

西土の牡丹徒らに自ら誇る
知らず東海に名葩有るを
徐生当日仙を求めし処
看て祥雲と倣せるは是れ此の花

【作者】草場　船山（一八一九年～一八八七年）、幕末―明治時代の漢学者。文政二年七月九日生まれ。草場佩川（はいせん）の子。肥前多久（佐賀県）の人。古賀侗庵（どうあん）・篠崎小竹らに師事。対馬（つしま）厳原（いずはら）藩のまねきで肥前田代領の藩校でおしえのち伊万里に学舎（現伊万里小学校）を設立した。明治二十年一月十六日死去。六十九歳。名は廉。字（あざな）は立大。著作に「日本史略伝」「国朝史略」など。

【語釈】＊西土…中国。　＊東海…日本。　＊名葩…名花、桜を指す。　＊徐生…秦の徐福
＊祥雲…めでたい雲。

【通釈】解釈としては、「西土（中国）では牡丹を、これこそ花の王者として自慢しているけれども、東海の日本に、すぐれた名花があることを知らい。徐福が秦の始皇帝の命をうけて仙人のすみかを尋ね歩いた当時、山に瑞雲のたなびくと見たのは、実はこの花であったのだ」。桜の美しさを誇った詩とある。